

一九七一年の幼稚園教育を考える



山 村 き よ

よろこび

中央教育審議会でのまとめも三年がかりでできあがったのと、しかも後半の審議では幼稚園教育の問題でながい時間をかけ、多方面の先生方によっていろいろな角度から真剣に討議されて資料ができあがったとのことを耳にして、近来になくほんとうに、心からよろこんだ。

公立幼稚園に在職していた頃は、一にも二にも「義務制にならなければ」と叫んできた私だったのに、義務教育年齢一年引き下げという論が盛んになった四、五年前からは、就学を「五歳児から」と唱える人たちに反論でぶつかったのも私だった。私学に変わったからかと、複雑な感情で自分自身を反省してみたり、また五歳児についてあれやこれやと調査をしたり、考えて、昔の五

歳児と今の五歳児を比べてみても、社会情勢や生活環境の変化から影響している「ある面の変化」以外は大差ないどころか、ますます個人差のはげしい実態がわかってみれば義務教育になった時の心配はより以上に大きいことに気づいた。その時、審議会での最終案は「ひとりひとりの幼児の心身の発達から考えて五歳児就学は無理であるため、幼稚園設置の義務づけをする」ことに決定したということがわかって、ほんとうにうれしいことだ。

過去においては二十年近くを公立幼稚園長会の先頭に立って涉外活動をつづけてきた私には、日本の国柄が「義務教育でなければ一文も出さぬ」ということを知りつくし、すべて制度の不備が幼稚園教育の発展をはばんでいるものと考えていただけに、この設置の義務づけが法律によってきまった上からはきつと国や市町村の教育予算は大幅に幼稚園教育に流れていくものと考えられ、

ほんとうにうれしいことだ。

まだまだ微々たるもの、不十分ではあるが、坂田文部大臣はじめ、私学のことを真剣に考えてくださる人たちによって私立幼稚園のためにもきつと脚光をあびる日が来ると思う。昨冬のある日NHKで行なわれた教育座談会では、代表の先生方全部が（代議士、文部省、日教組、小学校長、幼稚園長、教育評論家）私立幼稚園が日本の国の幼稚園を支えていて、現在も三分の二は私幼であることを認め、公立幼稚園増加とともに、私幼発展を「国が助成」しなければならぬことを発言しておられたこともほんとうにうれしかった。

制度の上からは幼稚園教育発展の糸口は、もうはつきりとしてき上がり、ことに先導的試行の結果が認められ、十年先か、二十年先に、用意万端整ったところで（子どもひとりひとりの身心の調和的発達からみて、私立幼稚園の発展や、幼稚園教育の体系づけなどの）幼児教育の義務化が実行されるならば、幼児にとって何と幸せなことだろう。

憂い

1 幼稚園の「生いたち」にしみついていてぬぐい去れぬもの

○私立幼稚園の体質

制度に守られても、国が豊かになっても、また、こんなに脚光をあびてきた幼稚園教育でも、どうにもならない「幼稚園の体質」は、今後の幼稚園教育の発展をはばむのではないだろうか。それは私立幼稚園の中だけにある個人立と法人立の関係やその他、すべて幼稚園の誕生から歴史につながる、どうにもならないことなのだろうか？

日本の幼稚園の多くが「特権階級の子弟を預るところ」として誕生したため、上流社会の礼儀作法を身につけさせることを保育内容として行ない、おとなの気のすむような驕の結果は、「行儀よい子、すなおで何でもいうことをきくよい子」として結果を求め、その保育法も、それぞれの幼稚園から生まれ、みようみまねで伝わり、固定して一定の型となり、また、そうした先生方の中には「徒弟仕込」でこそ立派な保母さんができあがるものと信じて封建性も加わり「幼稚園の保育の型」が根をおろしている、ことも事実だ。私立幼稚園が日本の幼稚園界に大きく貢献している反面、こうした中でつくられた歴史の中にはいろいろな問題もある現状だと思う。とくに私財を投じて幼稚園経営にあたるその運営が、「保護者はお客さまだ」という考え方から、その保育内容や、職員の勤務の仕方にまでつながって、どうにもならない幼稚園の体質となっているのではないだろうか。

○公立幼稚園の体質

公立幼稚園にしても、その誕生がやっぱりどうにもぬぐい去れないものをしみつてしまっているように思う。大部分は小学校内に併設として誕生し、すべてが小学校の借りものだった時代がある。園長も小学校兼任で「あいさつ園長」といわれる時代もあって、その幼稚園の運営は主任教諭の人柄や勉強ぶりによって幼稚園の保育形態までも固定させているところがなきにしもあらずで、今後ますます増加していくであろう市町村の公立幼稚園のことが心配でならない。そしてこうしたことが公立幼稚園の対立にもつながっていくことを残念に思う。

もちろん現在では日本じゅうのあちこちに、新しい幼児観をもつてすばらしい幼稚園教育にとりこんでおられる先生方が私立にも公立にもたくさんおられるので、やがてこの「体質」は消えることは思うけれど、日々進歩激変している時代の幼稚園がこれでよいだろうか。

2 教員養成につながるもの

世の中の人たちはもちろんのこと、同じ初等教育の道に手を取りあって進まねばならない小学校の先生方の中に、幼稚園教師に對する偏見はないだろうか？ もちろん同じ校地内に園舎をもつて毎日幼稚園の先生方の努力を知り、語り合っておられる先生方

には考えられないこととは思うが、実態をよく知らぬ先生方の中には一段も二段も低いものと考えておられるのではないだろうか？ また、世の中の人たちは幼稚園の先生方の給与の低いことと並行してその身分を考えている人たちもいるように思う。これらはすべて教員養成機関の立ちおくれによるもので、幼稚園が脚光をあびてきても、やはりそのイメージは変わっていないところもあるように思う。

一方では幼稚園の先生自身劣等感をもっている人たちも多いのではないだろうか。（高校卒業者がいわゆる徒弟仕込みから有資格者になったということで）戦前はいくら勉強しようと思っても地方にはあまり養成機関はなかったし、私立幼稚園の若い先生方からきく苦情は「勉強ができ得ない」ということが多かった。

これは私の一方的な解釈かもしれないが短大や四年制の学校で専門に系統的な勉強をしてきた人たちが新卒当時は現場に快く迎えられないのではないだろうか？……と、これも幼稚園教員養成の立ちおくれにつながるのだと思う。しかし、また、現代の人の中には何の自覚ももたず、やる気もなしに先生をしている人もなきにしもあらず。

今後設置の義務制が立法化されれば、教員養成にも、また資格の上にもきびしい反省がなされる時がくるのではないだろうか？そして幼稚園の現場にも再教育や研修の道がもっと開かれてくる

ように思う。その時を待つまでもなく、私たちは今から再度勉強の方法を考えねばならない。

希いをこめて

今から三十年前、二十年前の、全身でぶつかっていた「幼稚園の先生時代」が想い出される。あのような生活をもう一度、今の子どもたちに味わわせてやりたいものだ。

●幼稚園の往復には必ず友だちを誘い合って登園させ、保護者の付き添いを禁じて保育効果をみた時代には、子どもの誘いかいや今のような交通事故など考えてもみなかった。一週一回の園外保育には少人数で主任教諭と担任だけの生活ですべてが子ども同士の自主的活動ができ、市電から地下鉄に乗りかえたり、国鉄山の手線をのんびり一まわりするなど、二、三十分間の徒歩見学は都会でも十分実施でき得たのに、今の子ども達の生活の変化はなんとあわれなことだろう。これも公害の一つ？

●一日がかりで作った砂場の遊園地が「あしたの朝までこのまま崩さないでね」と、ひらがなで書いた担任名の立札のおかげで、そのまま残されていた子ども心は今でも持ちつづられそうに思うけれど……、むずかしいことなのだろうか。

●狭い幼稚園の庭を隅から隅まで利用して、小鳥はもろんのこと、ウサギ、ニワトリ、リス、伝書バトまで飼いならして子ども

たちのよい遊び相手をさせ、ニワトリの生んだ卵がゆで卵となつてたのしんだのは、戦後の物資のない時だっただけにうれしいことだった。しかししばらくたってからは一夜にして伝書バトが全部盗まれたり、小鳥はネズミや猫に食べられること何回か？ 苦労した生活のあれやこれやがみんなつかしく、その時のことがいきいきとした子どもたちの顔といっしょに目に浮かんでくる。

今、何よりも残念に思うことは、都会ではもうニワトリも飼えない。昔は幼稚園のニワトリの鳴き声をきいて早起きができると、喜んでくださった人も多かったのに、今では「安眠妨害」とたびたび苦情をいわれてニワトリ小屋をとり除かねばならないという話を聞いて、子どもたちのために何ともいえない、やりきれない気持ちでいっぱいだ。（この原稿をかいていたときにも、東京板橋区のある幼稚園で五回もつづけて、飼育している小動物が一夜にして全部猛犬に食べられてしまい、そのむごい記事が写真入りで新聞紙上に記されているのを見て同情にたえなかった）以下省略。

まだまだ数限りなく想い出され、移り変わる社会情勢におし流される子どもたちの生活を公害から守るのはそれぞれの幼稚園の先生方の責任ではないかと、これも自分自身を大いに反省する。